

福島紀行2018

ーフレコンバッグと共に暮らすー

2018年4月2日～4月4日

狛江の放射能を測る会 二階堂 まり

例年通り4月の始めの2泊3日、私たちは震災後8年目に入った福島を訪問しました。7回目の訪問です。毎年いわき市からスタートし、ほぼ同じ訪問先&ルートを辿ってお話を聞き、放射線量を測り、自分の目や耳で現地を見聞きし感じて来ました。東京にいと、よほど意識している人以外はすでに遠い過去のことのよう忘れれているし、報道を「そのまま」読み聞きしている多くの人は、避難指示解除がどんどん進み、学校が再開したニュースなどを見て「お～、順調に復興してるな」と思ってしまいがちです。毎年そのギャップを感じさせられているので、あまり期待はせずに訪問しました。新たな問題、更に複雑になっている問題があるのだろうと危惧しながら、でも、何かは進展しているのだろうという希望も持ちながら・・・

【伊東さんのご自宅へ】

まず、いわき市民訴訟原告団長の伊東達也さんのご自宅を訪問。主に、現在の被災地・避難者・帰還者の実態と「避難者訴訟」のことを伺う。浜通り医療生協前理事長（現顧問）で、障がい者施設「希望の杜」理事。

<避難者・帰還者の数>

避難者数に関して、政府は、10市町村に避難指示解除が出て50,641人（2018.1）へと激減していると発表。実際は、避難指示区域にあった12市町村の3.11の時の人口は147,427人で2017年12月の居住者は48,819人。しかもこの居住者の中には新たに入ってきた人（廃炉労働者や役場の支援者など）も含まれているので実際に「戻っていない」人（避難者）は、避難指示区域外の自主避難者約1万人を含むと10万人以上になる。

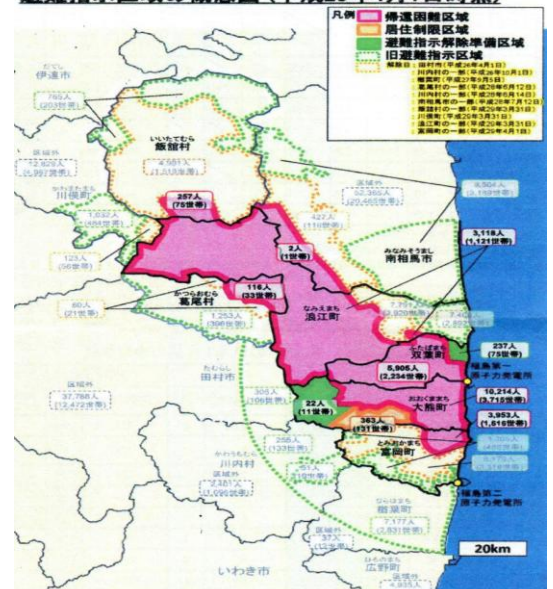
政府の統計の問題点は、①避難先で自宅を確保した人②復興住宅など公的住宅に入居した人③自主避難者を「避難者（つまり戻らない/戻れない人）」から除外しているために実態を正しく反映していないことだ。故郷の外に「恒久的な家のある人」は「避難者」ではないと捉えている。（筆者：帰りたいけど帰れる状況でないから家を買ってでも「避難」してるのに！）自治体自体も住民がどこに行ったのか、その中のどれだけが帰ろうとしているかをちゃんと把握していない。

問題は、「避難者数とは何を指すのか」だ。政府は「戻る



講演する伊東達也さん

避難指示区域の概念図（平成29年4月1日時点）



ための準備をしている人」だけを「避難者」としている。この定義では実態を隠してしまう。「避難者」とは、事故当時そこに住んでいて今もそこに戻っていない人、故郷を追われた人のことではないのか。

避難指示区域等の居住状況 (避難12市町村)

市町村	時点 (直近)	避難指示区域 (帰還困難区域を除く)				旧緊急時避難準備区域			合計			2011.3.11 時点の住民 登録状況 (避難指示十世帯) A	2018.2 現在の 未帰還者 数(A-B)
		居住者数	住民 登録数	居住率	住民 登録数	居住者数	住民 登録数	居住率	居住者数 B	住民 登録数	居住率		
田村市	18.1.31	230	287	80.1%		3,084	3,369	91.5%	3,314	3,656	90.6%	4,497	1,183
南相馬市	18.2.12	2,887	9,286	31.1%	0	不明	不明	不明	不明	不明	不明	61,024	不明
川俣町	18.2.1	285	946	30.1%					285	946	30.1%	1,252	967
広野町	18.1.23					4,096	4,896	83.1%	4,069	4,896	83.1%	5,490	1,421
楡葉町	18.1.31	2,255	7,100	31.8%		15	40	37.5%	2,270	7,140	31.8%	8,011	5,741
富岡町	18.2.1	429	9,396	4.6%	3,832				429	13,228	3.2%	15,960	15,531
川内村	18.2.1	85	298	28.5%		2,109	2,412	87.4%	2,194	2,710	81.0%	3,038	844
大熊町	18.1.31	0	0	0.0%	10,533				0	10,533	0.0%	11,505	11,505
双葉町	18.2.1	0	0	0.0%	6,073				0	6,073	0.0%	7,140	7,140
浪江町	18.1.31	490	14,909	3.3%	3,072				490	17,981	2.7%	21,434	20,944
葛尾村	18.2.1	256	1,328	19.3%	111				256	1,439	17.8%	1,567	1,311
飯館村	18.2.1	607	5,612	10.8%	252				607	5,864	10.4%	6,509	5,902
合計		7,524	49,162	15.3%	23,873	不明	不明	不明	不明	不明	不明	147,427	72,489

※1)居住者数は、新規転入者を含む。

※2)南相馬市は「旧緊急時避難準備区域」の数を集計していない。

※3)大熊町の避難指示解除準備区域・居住制限区域、双葉町避難指示解除準備区域の住民登録数は、帰還困難区域を含む
(2018年2月27日、福島県避難区域復興局避難地域復興課作成資料から作成した。)

【注】最右端の未帰還者数(A-B)は、元の居住地に戻っていない人数となる(もちろん死者も含んでいる)。
ただし、「南相馬市の約2万人(推定)」と「避難指示区域以外の避難者数約1万人(推定)」が入っていないので、
未帰還者数は10万人以上となることがわかる。

避難者数に関して政府は、10市町村に避難指示解除が出て5万641人(2018.1)へと激減していると発表。しかし、実際は10万人以上いる。政府は区域外避難者や復興住宅に入居した人を数えない。

<被災地の実態>

廃炉と放射性廃棄物処理の見通しは立っていない。破壊された建屋内ではまだ高い放射線量のところが残っているし、使用済み燃料の取り出しも遅れ、溶けた燃料(デブリ)の全貌・取り出し方も確定できず、比較的大きな地震や津波が襲えばどうなるのか県民は心配している。さらにデブリ取り出しに成功しても県外で処分地を引き受けてくれる見通しは明らかにされず、現地に置くしかないのではという認識も広まり出している。双葉町と大熊町では東電の社員が住みだしてはいるが、住民の居住者は依然としてゼロとなっていて、浪江町・富岡町の帰還者も非常に少なく、若い世代はほとんどいない。よほどの抜本策がなければ町の衰亡が懸念される。乗り越えるためには「結婚、子育てをしやすい生活環境を整える」ことが決定的に大切。加害者である政府と東電にその決意と覚悟を求める運動を強めなければならない。

◎2017年2月の双葉郡住民実態調査(広野町を除く7町村)の速報が9月に発表された。

- ・現在の職業：無職 55% 正規の職員・従業員 20.6% パート・アルバイト 6.9%
- ・生活の困りごと：健康と介護 53.4% 生活費 35.3% 人間関係 34.9%
- 仕事や事業 25.2% 住居 23.9% 家族関係 21.4%
- ・今後の生活について：ある程度不安 40.5% とても不安 33.8% どちらともいえない 10.5%
- ・不安なこと／つらいことが7割を超えた回答：
原発の廃炉までに事故が起きないか 71.4%

中間貯蔵施設・廃棄物施設の安全性 70.3%

地域のつながり・交流が薄くなった 74.9%

長年の友人・知人などのつながり、交流が薄くなった 72.1%

・ 各種の精神不安：アルコール依存症、孤独死（70 人超）、自殺（99 人）、

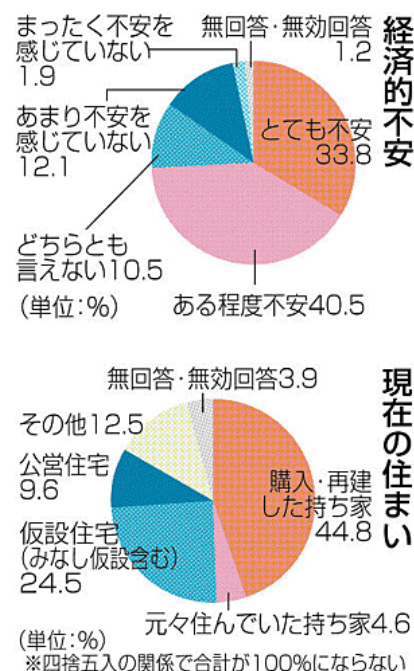
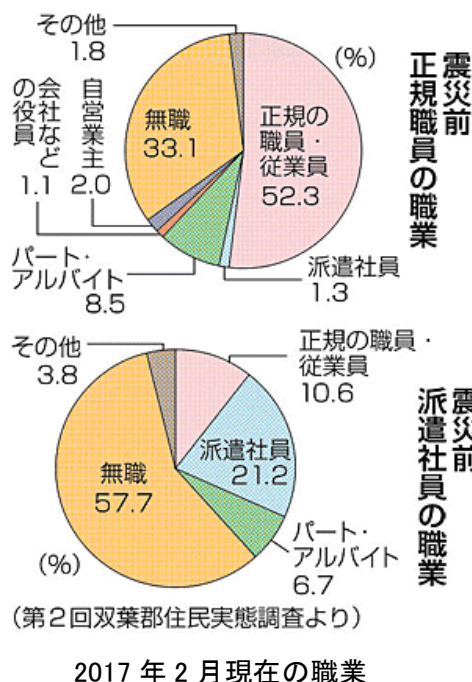
震災関連死（2225 人・直接死は 1605 人）

・ 子どもへの影響：心理的悪影響、（運動不足などによる）体力低下・肥満など

今も、被災者が仕事や健康、住まいなどの面で大きな課題を抱えたままであることが浮き彫りになった。

研究チームは「依然として仕事を通じた被災者の生活再建に課題がある。震災と原発事故の影響は、非正規雇用など、より不安定な立場にいる人の方が大きい」、「多くの被災者は震災直後に職を失い、避難先を転々としてその度に仕事を変えなくてはしなかった」と、被災者が仕事に就きにくかった事情を分析している。

「精神的健康状態が悪く、うつ病に近い状態」とされる人の割合は 56.5%に上った。



第2回双葉郡住民実態調査報告書(2018 年 1 月)より (福島民友 2018/2/18)

◎甲状腺がん検査

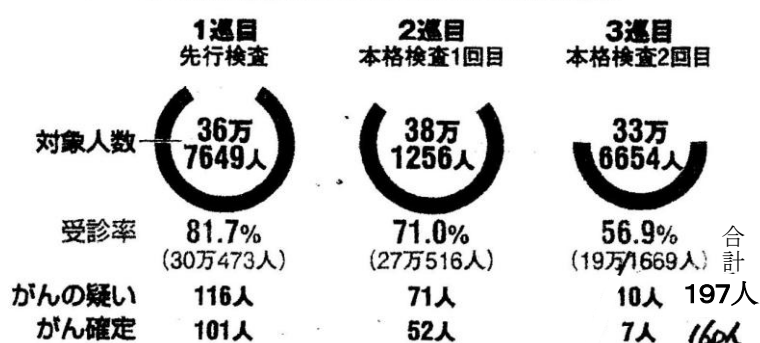
右図の通り昨年末の合計で検診によるがんの疑い 197 名、手術 160 名になった。

受診率が落ちた理由・・・もう大丈夫なんでは？と受ける意欲が落ちた。もう心配したくないということなのだろうか？

浪江では「被曝手帳」を出しているが、ヒロシマと同じになるからやめてほしいとかいわゆる「偏見」への心配がある。「受診証」ではどうだろうか。また、この癌の手術に関してはみんなが黙ってる。普通の癌手術の場合

「早く見つかってよかった」とか話題にするのに、誰が手術を受けたかが全く表に出ない。ヒロシマの差別の影響なのではないだろうか。(筆者：伊東さんは常に「癌は原発事故の原因ではない」という学者もいるが、原因論争に終始するのではなく、大切なのは将来にわたって面倒をみるシステムを作ることだ」と主張されている。)

甲状腺検査の結果 2017年12月31日現在



<ふるさと喪失訴訟福島地裁いわき支部判決 (3/22) =ふるさとをかえせ・避難者訴訟>

故郷喪失慰謝料として 2000 万円を請求したが、A 地区 (3 種類の避難区域) に対しては 150 万、B 地区 (国からの指示はなく首長の指示で避難。6 ヶ月で解除) に対しては 70 万とされた。

判決文には、ふるさと喪失の悲しさを述べた原告の言葉が 10 ページにわたって採用されていて、全て排除できないものだとの考えが認められるが、金額は極端に減らしていて国への付度が感じられる。(筆者：「故郷はそんなに軽いのか?!」との言葉が胸に刺さった。)

判決は原子力損害賠償法に基づく東電の責任を認めた。

原告団が求めているのは民法 709 条に基づく東電の過失責任である。

原子力損害の賠償に関する法律(無過失責任、責任の集中等)

第三条 原子炉の運転等の際、当該原子炉の運転等により原子力損害を与えたときは、当該原子炉の運転等に係る原子力事業者がその損害を賠償する責めに任ずる。ただし、その損害が異常に巨大な天災地変又は社会的動乱によつて生じたものであるときは、この限りでない

民法第 709 条 故意又は過失によって他人の権利又は法律上保護される利益を侵害した者は、これによって生じた損害を賠償する責任を負う。

【 いわき市民放射能の測定室たらちね 】

毎年来るたびに新しい挑戦をしていて、いつも感動！今年は「たらちね・子どもドック」を 4 月 23 日にオープンする。去年は「放射能測定室」に加えて「たらちねクリニック」をオープンして内科・小児科と子ども相談室を始めた。受診者は 60% が 18 歳未満だった。今年度は更に子どものための健康ドックを始める。甲状腺超音波（エコー）検査やホールボディカウンター、尿中セシウム検査などの他に普通の身体測定や心電図や血液検査もするが、血液検査では甲状腺ホルモン数値も調べることができる。学校の検査で引っかかった子や外で遊べないために肥満になる子の問題もあり検査にくる。18 歳未満は無料で検査してもらえる。学校では県から医師が送られて検診があるが二年に一度だし、大きな違いは、学校では子どもが一人で受けて後で結果が紙で渡されるだけなのに対し、ここでは親子で一緒にエコー検査の画面を見ながら説明を受け、納得するまで話を聞くことができる。

更にびっくりしたことには、「こどもリラクゼーションプログラム」（5 歳～15 歳）まで始めたこと。沖縄に作った保養施設「球美の里」で保養プログラムに参加した子どもたちにアンケートをとったところ、一番よかったと答えたのがなんとマッサージだったことからスタート。アロママッサージだ。壁にあった子どもへの呼びかけの文章が、ストレスや心身の不調がある



昨年開設された たらちねクリニックを見学
藤田操院長。内科・小児科。普通の診療と放射能に関連した診療。毎日フル稼働。他に医師 7 人の支援体制がある。10 歳の時に父親と常磐ハワイアンに来て、フラダンスを踊ったとか。運命の地？ 栃木出身。趣味はマラソン・読書・三線。



たらちねクリニックマネージャーの松坂美由紀さん(左)。ソフトでいい説明がうれしい。ベータ線測定器も案内。

ときは・・・みたいな中年サラリーマン向けのような言葉だったのでちょっとショック。あの事故がいかにか子どもたちに悪影響を与えていることか・・・。代表の鈴木さん自らが別室でずーっとアロママッサージを施していたのでさらにびっくり！そして、二年前に購入したβ線測定器（2千万円！）が需要に追いつかないのもう一台購入を計画と聞き、またまたびっくり！！

院長の藤田先生は栃木県出身、3.11の直後から福島の子どもたちに寄り添い、その後、球美の里で診療にあたり、今はたらちねの院長に。「3.11の後、福島の子どもたちを一番守らなければならないのに、逆に放射線量の高い所へ子どもたちを戻そうとしている。新聞もそれを歓迎する論調だ。たらちねのような病院があってもいいなと思った。放射能について相談できる場所がここしかないという人がいっぱいいる。」穏やかでにこやかでとつとつとした感じですがごく魅力的。マネージャーの松坂美由紀さんも（去年も書いたが）柔らかくて包容力のありそうな子ども病院にぴったりの女性。



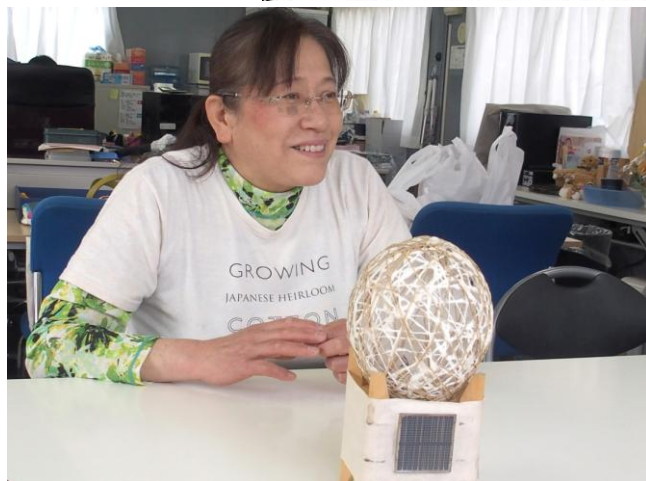
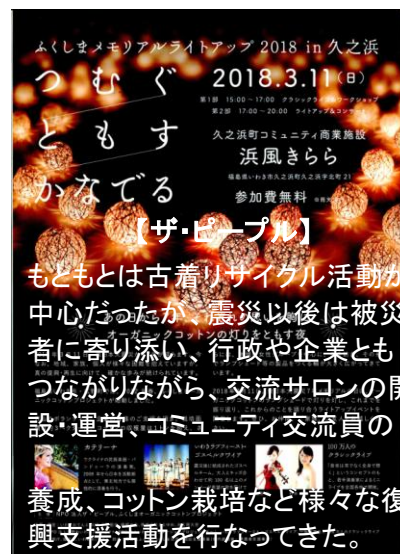
こども相談室。診察室の隣りにある。お近くの診療施設と比べていかがですか、この雰囲気。

【ザ・ピープル】

震災直後から、復興の中心にいて、被災者に寄り添い、企業や行政ともつながって様々な活動をしてきたザ・ピープルのボランティアセンター（プレハブの小屋）を訪れると、素敵なランプシェードが目についた。これはコットンを紡いで、製品には使えない不揃いな糸を使って作ったもので、地の部分は千年も続くネパールのお経を書く紙で、中には防虫ネットが入れてあり美しく光を分散させるようになっている。下部にはソーラーパネルがついていて、昼間に太陽光で充電して夜に灯す仕組み。今年の3.11に久之浜で320個を灯したそうだ。

もともと、綿は塩害に強い作物として東北の荒浜で栽培されていたが、放射線の吸収率も低いことから震災後、復興支援としてザ・ピープルが栽培を始めた。第7回コットン・サミットを10月に「福島いわき」で開催することになっている。県や市からのサポートもある。「民間主導で行政が支える」ことの重要性を行政側も学んできたというのだというお話だった。サミットは震災のあった2011年の5月に全国サミットとしてスタートしたもので、今年は復興サミットとして位置付けている。コットン栽培は軌道に乗ってきているが、毎年同じように収穫できるわけではない。去年は天候が悪く、収穫量が激減。今年は種まきを早めたいのだが、応援ボランティアの方たちの予定も決まっており、調整が難しいなど問題もある。

小学校でもコットン栽培をしている。3年生は震災の記憶が全くない。5年生で少しある程度だ。



久之浜でライトアップしたランプシェードを前に大いに語る、吉田恵美子さん。

栽培を通して、自分の着ているもののこと、農薬を使わないことへの意識、そしてこの栽培のきっかけは 3.11 なのだと知らせ「震災」を自分の地域の出来事として受け止める「震災教育」も兼ねている。

二年前に立ち上げた「いわきアカデミア」という事業は、18 歳で流出してしまう人材が多いため、教育委員会・地方創成課・商工会なども協力して、地元にいる間に、いわき市とつながる機会をもうけ、地元の価値、素晴らしさを知ってもらおうという計画。小学校で冊子を作って地場産業を紹介、中学校では学校での市内企業の説明会、高校では希望者は職場体験ができる 6 つの体験コースなどを予定。また、秀でた活躍をしている人たちの話が聞ける機会も作っている。地元への思いを育て、一度外に出て行っても、いつかまた帰って来て欲しいと願っている。

大熊町の 30 代の女性は、被ばく牛を育てている。理由は「牛を殺せない」ということではなく、「牛たちに意味のある生き方をさせたい」こと。野生の動物たちが住んでいるところと人間の住む地域との間に、牛たちが草を食べるところを作り、野生動物が人間のエリアに入っていくことを防ぐ。彼女は更にそこでコットン栽培をしようと言ってきた。土壌調査すると 1 万 Bq/kg 以上ある。たらちね測定室からは本人が被ばくするので土いじりは勧められないと言われ、本人にその通りに伝えた。だが本人は「ここで作って放射能が出なければ、コットンは移行指数が低いということの証明になる」と言っている。

フードバンクも立ち上げた。行政が実施している事業はあるが、対象は 18 歳未満のみで審査に時間が掛り、しかも許可されるとずっと支給され、依存してしまうなど問題がある。ザ・ピープルでは必要な時にすぐ提供し、就労するまでの 3 カ月程度を目途に、一時的にしのげるようにする考え。市の相談窓口とのネットワークを作りそこを通して提供する。パルスシステム福島が食品の提供をしてくれるし、農家ともコネがあるので市場に出せなかったものなどを提供してくれる。



積極的な支援は次々と新しい事業を引き出す。「いわきアカデミア」、即対応の「フードバンク」の開設など、疲れを知らない活動が続く。

【 広野町・楡葉町 】

広野：〇〇荘、〇〇ホテル、旅館〇〇、ビジネスホテル〇〇、民宿など 6 号線沿いにはいっぱい原発作業員など町外からの人たちの宿舎がある。

楡葉：今も日本の原風景が広がる。そこにフレコンバッグがズラーッと並びその隣でおじいさんが畑を掘り返している。620 年以上の歴史がある寶鏡寺の桜の美しさ、そして、思いつくままに書いても、桃・プラム・レンギョウ・ユキヤナギ・芝桜・タンポポ、ツクシ、ボケ、カイドウ、水仙、黄水仙、木蓮などがそこそこに咲き誇っていた。

【 寶鏡寺の早川住職を訪ねて 】

早川さんから怒りのこもった熱いお話を伺った。

一言でいえば「起こるべくして起きた過酷事故」に尽きる。3.11 前から 40 年間危険性を訴え続けてきた。様々な事故が起きてきたが、何一つ東電は耳を傾けることはなかった。原発のそもそも

の始まりが平和利用などというまやかしと、良心的な科学者の排除から導入された。その後、スリーマイル島原発の事故、チェルノブイリ原発の事故に対して全く他人事で、日本は大丈夫と言い続け、さんざん注意を呼びかけても全く無視し続けてきた。この東電の姿勢により事故は「起こるべくして起きた」と言わざるを得ない。そのことを裁判は全く無視している。

檜葉町には1割しか帰ってきていない。子どもを産み育てられる世帯はその内数%。帰らない理由は①廃炉作業も安全に収束できるか不安が消えない。②安全に行ったとしても熔融燃料（デブリ）を安全に取り出せるのか③取り出せてもその行くあても無い。④第2原発も廃炉にするとしない。（その後の6/14 東電はやっと廃炉を表明）・・・つまり線量も高く、安心して生活できる基盤が無い。裁判では時系列で歴史を羅列し、3.11以後に如何にひどい生活を強いられているかを陳述し訴えた。現状に理解を示すかのような判決文の一方で、わずかな償いしか認めなかった。

町は帰還者をカウントしなくなった。住んでいる「住民」をカウント。元気で商売をスタートしたとかはニュースで取り上げるが、移住先での苦しんでいる人たちのことはニュースにならない。学校は小中併設で1割も戻らず、避難先から通学している。「復興神話」だ！

津波が予見できたかどうかが焦点になってしまいが、原発事故は津波がなくても起きる。子々孫々、電気料金と復興税で国民が負担することになるのだ。現在、田地畑を潰して住宅を作っているが、体のいい姥捨て山だ。やがて町は死に絶える！強制避難なのだから元の生活ができるようになるまで補償すべきだ。

早川さんの田んぼがフレコンバッグの仮置き場になっていたが、通ったとき作業車が片付け始めていたのでやっと少しずつバッグを移動するのかなと思い、聞いてみたところ、第二原発の横に減容施設（全体量を減らすためにバッグの中身を分類して放射能が比較的低くて燃やせると判断したものは燃やしてしまう）を作り、そこにバッグを運搬するために、常磐道に新たに檜葉ICをつくる。そのためその出入口の見栄えが悪いのは困るので邪魔なフレコンバッグはどけているのだとのこと。



寶鏡寺住職 早川篤生さんを訪ねて
(ふるさとを返せ 避難者訴訟原告団長)



早川篤生さん(中)。一言でいえば「起こるべくして起きた過酷事故」と怒りをあらわにした。帰還者は1割で年寄りだけ。姥捨て山だ。やがて町は死に絶える！と訴える。



早川さんの田んぼは3年の約束で仮置き場になったが、8年目の今年は常磐道の檜葉ICの建設現場となった。見栄えの悪いフレコンバッグを片付けているとのこと。

【 富岡から6号線に行く 】

富岡の駅前はずっかり変わった。津波被害の残骸は片付けられ、列車は通るのだろうが生活の気配のないのっぺりした空間で悲しい感じた。夜の森の桜は満開だがやはり線量は高く、美しさとのアンバランスが胸に刺さる。

浪江も富岡も避難指示解除されているが人間の営みの気配は感じなかった。

6号線を浪江まで行く。除染しても線量が高く走行しか認められていないため、サイドミラーに測定器を結び付けて測定。時速約60キロで走ったが、放射線量の最高値は $4.4 \mu\text{Sv/h}$ 。浪江町では請戸地区を回った。ここは津波で多くの方が流されたが原発事故のため避難を強制され、約一ヶ月も救助・捜索ができなかったところだ。家一軒もない更地が延々と続く。漁港には新しい船が何十艘と係留していたが、七年たった今も試験操業だ。

事故当時、避難者が放射能を浴びながら逃げた114号線に行く。除染しているがここでも最高値は $4.4 \mu\text{Sv/h}$ だった。赤宇木、津島・・・美しい小道が続く。サルが一匹走り抜ける。周りには高いフェンスのある仮置き場がいっぱい。トンネルだらけで、渋滞しながら逃げるのはさぞ恐ろしかっただろうなと心が痛む。



夜の森の桜並木。私たちが見た2016年に続く2度目の満開。赤ちゃんを抱っこした夫婦を見かけ、少し心配になる。



(写真上・左) 浪江町の請戸。津波で流され、いまは何もない野原が続くなか、取り残されたように1件の家が見えた。震災翌日の早朝に原発事故で強制避難となり、捜索は1カ月後に。助けられたはずの命があったといわれている。

(写真上・右) 請戸漁港はまだ試験操業の範囲だが、真新しい漁船が数十艘係留されていた。

(写真左。昨年3月避難指示が解除された川俣町山木屋) 6号線と同様に走行のみ許可されている114号線を山木屋へ。多くの住民が知らされないまま高線量の赤宇木・津島を通して避難した道だ(走行中最高値 $4.4 \mu\text{Sv/h}$)。



【 飯坂温泉から 399 号線を飯館村へ 】

2014 年に会った桃農家の大塚広さん夫妻と再会！リンゴ、桃、プラムなどを栽培。以前にお話を伺ったときは、畑の土を削れといわれているが、表層の土が大事なんだと話していた。それが、土を削らなくて済んだとのことだった。あの頃よりは線量も下がり、お元気で精を出しておられた。冷温保存してあったリンゴを山のようにプレゼントしてくださったが、家に帰って食べたらその美味しいこと！桃が食べごろになったら送っていただくことにしてお別れ。こういう出会いもホントに素敵だ！！

【 飯館村 】

飯館に入ると色々な想いが交錯して特有の気持ちになり、ちょっと緊張する。一年目に行ったときに、あまりに美しい里山と鳥の声さえしない無音の「時」が止まったかのような世界に怖ろしさを感じたことが忘れられない。12 号線は大型トラックがバンバン走る。そこいらに作業車が停まり、機材がたくさん置いてある。

前回より放射線量が高いところがある。昨年、あまりのフレコンバッグの数の多さに驚いたが今年は更にすごい。広~~~~い山合いの里の右から左まで見渡す限りフレコンバッグの山。今更ながら広いなあと感じがして、ここに住み馴れていた人が仮設に住むのは、狭さだけでも耐えられないだろうなと思った。そして早く、広い家、広い土地に帰りたいだろうなと思った。

< 飯館村役場 >

総務課企画係長 三瓶（さんぺい）真さんに 1 時間半近くお話を伺う。

◎ 帰還者の把握

飯館は避難が 1 ヶ月遅れたために多くの被ばくをしたが、避難までに時間があつたことで、他の町と違って避難先などを住民が窓口にしっかり届けることができた。そのため避難連絡先は全て把握できている。そこからの移動も届けが出されているので、避難指示解除のときにも連絡して個々人の希望を聞くことができた。

2011 年 3.11 当時の人口 6,509 人



福島市にある 399 号線沿いのリンゴ・モモ農家。今年は桃の花が大分開いていた。つぼみのうちに摘み取るそうだが、夫婦二人では多すぎて毎年遅れてしまうとなげいていた。



伊達市と飯館村の境。2012 年 4 月に初めて訪れたが、鳥の声さえしなかった。象徴のモニュメントはかなり傷んでいる。



ひもろぎの里は一面、フレコンバッグの置き場に。馬頭観音の石碑はかるうじて残されていた。フレコンバッグは飯館村だけでも 230 万袋。

2018 年 3.1 現在の状況（人口） 618 人 320 世帯 （ほとんどが 50 歳以上）

内訳：帰還者数：537 人 260 世帯 新住民：42 人 23 世帯（役場の支援者）

老人ホーム住人：32 人 避難せずに住み続けた人：7 名 5 世帯

（筆者：来年 3 月で仮設住まいが打ち切られる。帰村する人が何人いるのだろうか。帰れない、帰らない人の生活はどうなるのだろうか？現状では飯舘村の外に家を建てた人も、住民票は飯舘のままにしておき避難地の行政サービスを受けるといえることができるというが、その後は継続するのだろうか。）

今年度から再開する認定子ども園・小学校・中学校にはあわせて 104 人が通う。ほとんどが避難先からマイクロバス等を通っている。友だちが戻るから一緒にという子が多い。（筆者：この変則的な開校は長続きするのだろうか？）

<復興計画>

農業の復興が第一の柱。まず、花卉（かき。ハウス栽培）から始めている。米/野菜、そして和牛/肉牛の復活をしたい。村として農地の基盤整備をし、それを待って米を作る。水田の水を取る溜池の除染も大事になる。野菜は 2 回の検査をパスしなければ販売できない。現在、道の駅には出されているが農協を通してドンと売るといえるわけにはいかない。今は、多くは家庭菜園程度。

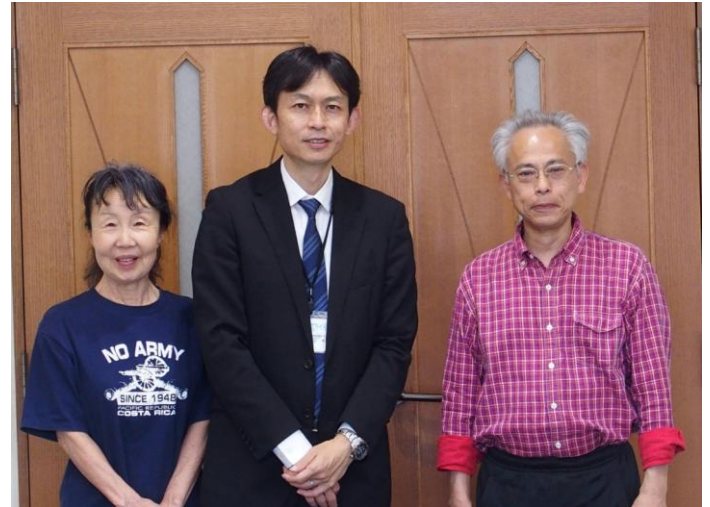
帰還者の中でも年寄りでは体力なくなり農機具もなくしているので、若い人たちがその農地を借りて維持管理していくため復興組合をつくっている。（と話してから「若いと言っても 50～60 代です」と付け加えた・・・ん～大変だ！）職員数・予算の制約があり 20 行政区の内 2～3 行政区の面倒を見るのが目一杯だ。フレコンバッグは飯舘だけでも 230 万袋！！中間貯蔵施設に運べたのはほんの一部で、一昨年 5 千袋、昨年で 2 万袋。袋の中の 3 割は燃えるものなので燃やして量を減らすために村の中に焼却施設をつくりたい。また、放射線量による分類をし、4000Bq/kg 以下のものは資材として使うことを考えている。

牧畜・牧草に関しては数頭だが実証実験をしている。飯舘牛の多くは売られてしまったが、県外で飯舘牛の血統を「までい牛」と名付けて育てている畜産農家が二軒あり、一軒が戻ってくる予定だ。

<将来の見通し>

まずは「学校」を再開させねば若い人は帰ってこない。高校を再開したい。県立が無理なら村立でも良い。

移住し定住する人を呼び込みたい。そのための専門職員を配置した。目玉として



役場の総務部企画係長の三瓶(さんぺい)さんに帰還状況と復興計画を聞く。復興の柱は農業、そのための追加除染と農業従事者の確保、将来のための高校の再開を、と語る。



特養ホーム。避難しないまま住み続けた。当時は 100 名を超えていたが、現在は 32 名。

- ① 200 坪の土地を提供して 20 年住んだら所有できることとする。
- ② 1 か月 10 万円を 2 年間支給して何か始めてもらう。(飯舘と同じ「日本で一番美しい村」に登録されている島根県の海士町(あまちょう)での例がある)
- ◎葛尾村ではシングルマザーを引き付けるプランとして待機児童無しにしている。

来年は仮設、支援金がカットになり、帰郷するかどうかの判断を迫られる。帰り易いようにはしたいが 1000 人か 2000 人程度か？アンケートによると、帰還したい人 30%、迷っている人 30%だった。村長は仮設を延長するつもりはない。何故なら仮設がある場所は元々他の自治体の工業用団地とか事業計画のあったところだからいつまでも迷惑はかけられない。飯舘に戻る人には空いている家を使ってもらったりすることも考えている。

賠償金に関しては、あるところで切られるのはしょうがないと思う。頑張ろうと思っても頑張れない病気の人や体が不自由な人とかには国が手を差し伸べてほしいし、頑張ろうと思っている人たちに道筋を整えて収入補填とかをしてほしい。来年は判断が迫られる年になる。帰還者への当面の支援として生きがい作りが必要だ。また、生業支援が必要。事業をやるときに補助するなどしてほしい。現行制度には、営農するなら 1000 万円の 80%を国が、5%を村が出すというのがあるがこれは大農業でないと適用できないものであり、被災地目線ではない。もっと柔軟にしてほしい。

＜追加除染＞

村の 75%が山林で、除染は手付かず状態だ。平地でもホットスポットがある。山の除染が必要。

飯舘は元々県内で所得が最下位の貧しい村だったが、貧しいということを感じなかった。それは、豊かな自然の恵みがあり、山菜や木の実などをとり食べ物は自給自足できたのでお金もかからず楽しみがあり生活を補ってきた。だから、里山ぐらいは除染したい。それも村主導でやりたい。どうせ村民

が下請けとして雇われてやっているのだ。大手にやらせるのではなく村にその金をくれれば村民主導でできてうまく行く。村民はうまいだけでなく、ここは〇〇さんの山だとか庭だとか知っているので大切に丁寧にやる！しかし、国は認めない！



12 号線沿いの公民館脇にあるフレコンバッグの保管予定場所。もともと飯舘村は福島一の貧しい村。それでも生活できたのは山の恵み。少なくとも山里の除染は必要と語る。来年は仮設住宅が打ち切られる。何人帰ってくるのか。新しい移住者をどう呼び込めるのか。放射能被害を受け、今なお1μSv/hがそこかしこにある村の苦悩は続く。

【終わりに】

帰還するかどうかの選択がさらに現実になり重くのしかかっていることを強く感じた。直に目の前の人から聞く「再建」の現実のつらさ・・・子どもたちを戻さねば再建できずしかしこの線量・・・。部外者が簡単には何か言うことはできないという空気が自分を包み、もやもやしたやり場のない気持ちになった。

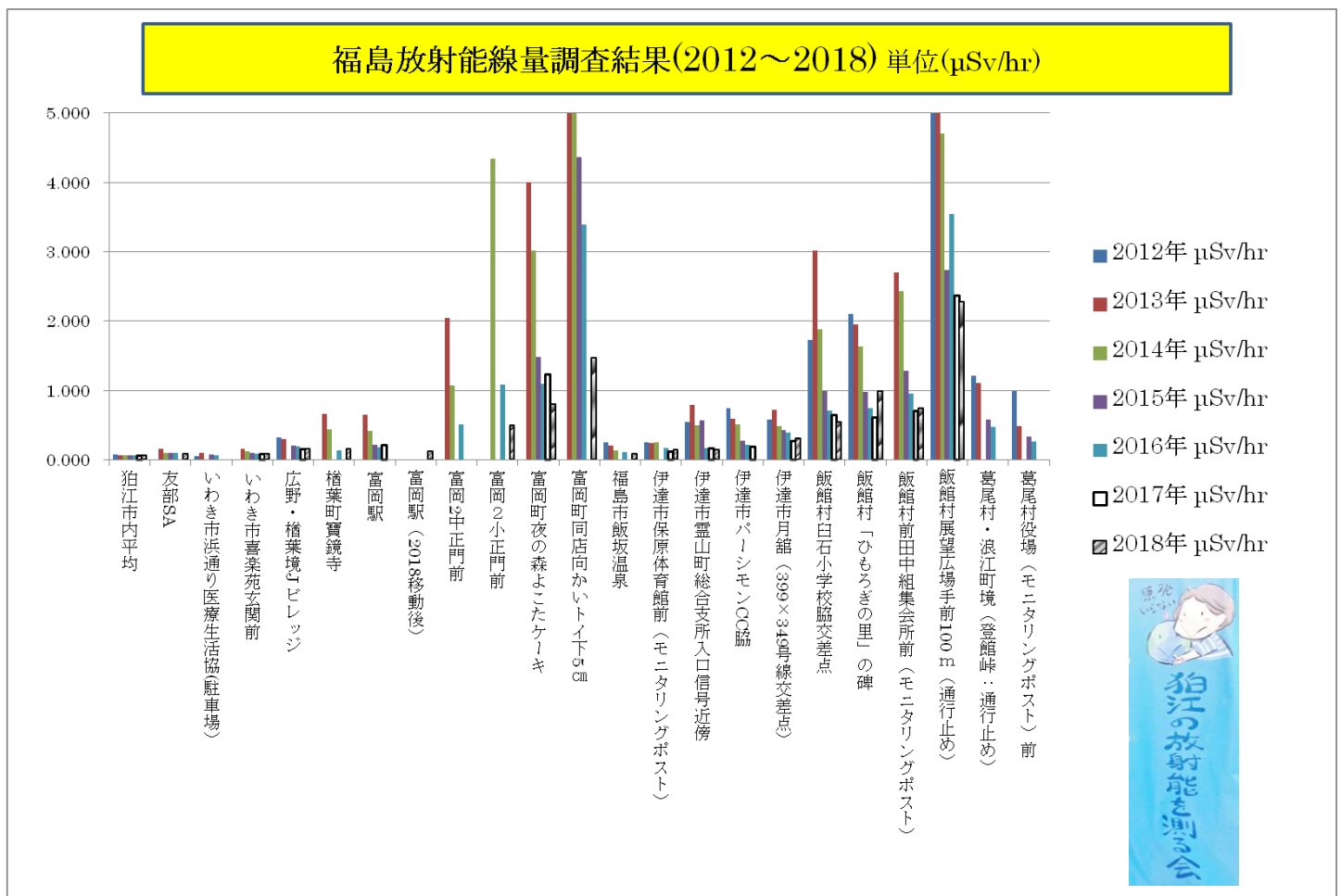
飯舘村に現在積まれているフレコンバッグの数が 230 万袋という現実！聞いたときはメモに追われてあまりピンとこなかったが、よく考えると、被災当時の人口が 6,509 人だから、一人当たり 353 袋。土だとフレコンバッグ 1 つに 1.25 トン入れられるそうだから、一人当たり 441 トンの汚染土が積まれていることになる。しかも村の 75%を占める山林はまだ手つかずである。本当にここ

で暮らして再建していけるのだろうか・・・

延々と続くフレコンバッグ、生活の匂いのしない避難指示解除地域。しかし、全国で報道される「帰還」「学校再開」の「明るい」ニュース。

帰りの車の中で私の頭をよぎっていたのは、何年か前にテレビや写真で見た三沢基地からイラクに派遣される自衛隊員を笑顔で送り出す町の人たちの姿だった。多分、別の角度から撮ったら泣いている人や心配そうな人が写るんじゃないかなと思ったのだ。そしてその次に頭に浮かんだのは、オリンピック招致のために安倍首相が言った言葉だ。「(原発事故による)健康問題は今もこれからも全く問題ないことを約束する」

後二年に迫ったオリンピック、それまでに福島は「復興」したことになるのだろうか。私たちができることは何なのだろうか。



狛江の放射能を測る会(<http://hakarukai.clean.to/>)

連絡先：西尾真人 ☎03-3480-7477